

しらたかのまちづくりに助言—— 田勢康弘氏、青木実氏、上原恭子氏が来町

11月15日～16日、町観光交流大使の田勢康弘さん、青木実さん、上原恭子さんを迎え、現在の白鷹町を見ていただきながら今後のまちづくりに対する意見をいただきました。

3人には、年に一回白鷹町に来町していただいており、今回は田勢さんや青木さんが「以前からフアンだった」という鈴木味噌店（浅立）で味噌の仕込みを体験していただきました。

また、町内のあちらこちらにたくさん柿が実っていることに注目され、「もったいない。宝の山だ」「何か渋柿プロジェクトを考えよう」などと、まちづくりの新たな可能性に目を向けられました。



仕込んだ味噌を囲んで記念撮影

しらたかへの思い

Message



野菜ソムリエプロ
上原恭子さん

白鷹町観光交流大使になって4年目になりますが、おじゃまるたびに、いつも同じキーワード「白鷹町は宝の山」を明確にして東京に戻って来ています。

今年もいくつか見つけた白鷹町の宝を多くの皆様にお伝えして、町のために私の得意なことでお役に立てることを形にと、料理や野菜の仕事のほかはずっと続けているマーケティングの仕事の経験も生かしてプラスできたらと思っています。

進化中の「日本の紅（あか）をつくる町」の「シラタカ・レッド」につながる加工品などもきちんとしたコンセプトで増やして行くお手伝いもしたいし、白鷹町でも東京でも何かワクワクするイベントを企画できたらと、東京からいつも心から応援しています。



ジャーナリスト
田勢康弘さん

「しらたか」。声にならない程度にそうつぶやいてみるだけで涙が出そうになる。白鷹町に住んだのは中学生のときの3カ月だけ。アメリカには都合5年住んだが、ふるさととは思わない。若くして逝った父と母の白鷹町への熱い思いが私に乗り移っている。だから私にとって白鷹町がどの土地よりも大事なふるさとなのだ。

鮎貝の駐車場からまっすぐに伸びる緩やかな坂道を、母の手にすがりながら登って行く。古稀をすぎた今でも坂の上の青空と道端の家の壁に下がった干し柿が忘れられない。これまでたくさんの恩師に導かれてきたが、もっとも影響を受けたのは荒砥中学校時代の鈴木実先生である。私の英語に置賜訛りがあるのはこの先生の影響である。



会社役員
青木実さん

「SHIRATAKA RED」の提案と「おどる！シラタカ・レッド」の作詞をさせていただいた関係で、ダンスフェスタの審査委員長をしました。参加者の熱い思いが伝わり、大感激。参加賞のバンダナもデザイン。そして、いま好評の白鷹料理のレシピ集「ごっつおうしらたか」、伝えたい季節の伝統料理55種レシピ、企画、デザインやイラストを担当、素敵な仕事でした。

こんな風に白鷹町とさらに深いつながりができ、訪れる回数も増え、ますます「町外町民」になってきました。東京の周りの人から「なんで白鷹町の観光交流大使なの？出身？」と聞かれますが、そんなときは『白鷹町と友達なんです』と答えます。

おいしい町、豊かな町、元気な町、うらやましい田舎、ですね。